林業と野生鳥獣との共存に向けて

森林性鳥獣の生息環境保護管理

由井正敏・石井信夫

日本は山国であるといわれている。確かに日本地図を広げてみると山ばかりであり、近年ゴルフ場や住宅団地等が造成されたといっても、まだまだ樹林のほうが多い状況である。しかし、その樹林のうちいわゆる自然植生と呼ばれるものは少なくなっている。林業の名のもとに人の手が加わっているのである。

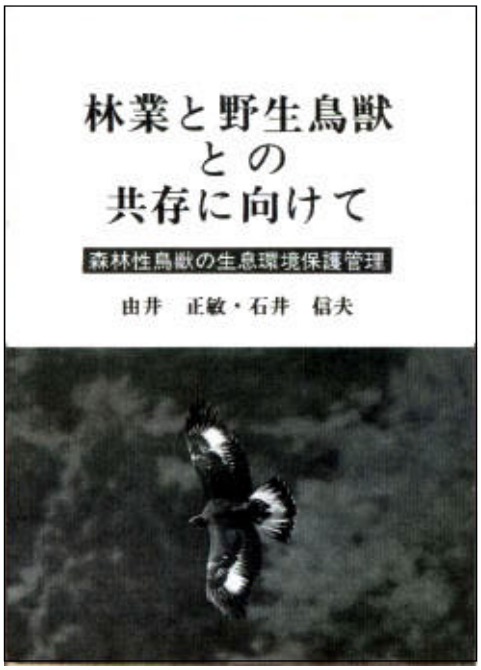
これからの時期、落葉樹は葉を落として冬支度に入る。町から少しはなれた山へ行ったとする。すると山筋や山麓の緩傾斜地は緑のままである。スギの植林である。また、葉を落とした林を覗いてみる。多くの木は根元からいくつかの幹を伸ばしており、昔、伐採されて萌芽したものだとわかる。また別の山を見る。一面緑のスギやヒノキの植林である。これが今までの「ヒトにやさしい」(=生きものにやさしくない？）林業の結果であり、日本中にいたるところで見られる状況である。

これらの林にしても「まだ」多くの野生生物が生息している。しかし、このまま経済（ヒト）優先で進んでいくと、今絶滅の危機が取沙汰されている種だけでなく全ての野生生物の存続が危ぶまれるようになる。

本書は、このような現状の中で調査された多くのデータをもとにして、いかにすれば人間の生活あるいは活動（ここでは林業を取り上げ）と野生鳥獣の生息が共存できるかについて、今では立場の弱い野生鳥獣側に立ちながら森林管理法を検討したものである。多くの調査データを元にした各論は説得力のあるものであり、またそれだけでなく林野行政・環境行政における法制度等についても現在の状況を整理している。また、野生生物保護管理における地域区分についても整理されている。

以上のように、豊富なデータや我々の仕事において気になる野生生物についての各論などおおいに参考になる図書である。例えば、最近はほとんどどこの調査地でも出現する感のあるオオタカについて、その生息環境や繁殖例をもとに「保護区設定の考え方」を示している箇所など、そのままコピーして報告書の資料編に入れたくなるほどである。しかし、「はじめに」及び「あとがき」の双方にあるように、これで全てうまく行くというものではない。これらはまだ、あくまでも現時点での試案であり、また日本全国どこででも通用するものではない。さらに、今後は地域レベルあるいはそれ以上の計画をも視野に入れていかなければならないことを示唆している。

（大阪支社長・浜田　拓）



【著者プロフィール】

■由井正敏（ゆい・まさとし）
1943年東京都生まれ。1966年東京大学農学部林学科卒業。農林水産省林業試験場を経て、現在、農林水産省森林総合研究所東北支所保護部長。農学博士。

■石井信夫（いしい・のぶお）
1952年東京都生まれ。1975年東京大学農学部林学科卒業。1980年東京大学大学院農学系研究科博士課程（林学専攻）修了。現在、財団法人自然環境センター上席研究員。農学博士。

発行：日本林業調査会◆定価3,800円
菊判◆280ページ

「カオスの状態」
ーさらなる他分野間の意見交換を

◆第１回野生生物保護学会大会

1995.10.20～22　於◆東京農工大学農学部　主催◆野生生物保護学会

新しく発足した「野生生物保護学会」の第１回大会に参加した。この学会は、学会機関誌である「ワイルドライフ・フォーラム」の巻頭言でも述べられているように、最近の研究分野の細分化の方向とは逆に末広がりの方向に向かうものであり、生物学だけでなく、人文・社会学をも含めて創造的に融合したうえに成り立つものであろう。文中ではこれを一種のカオスの状態と表現している。

今回の大会における発表についてもまさにカオスの状況そのものが感じられた。それは、従来の学会におけるように調査の結果を発表するものから、実際の保護・管理の現状を紹介するものまで内容的に様々であったということである。これはもちろん、新たに発足した学会の第１回大会であり、また学会の目標とする内容から考えれば当然のことといえる。

調査研究の結果をいかに現実の問題にフィードバックするかを常に考えなければならない我々としては、個々の調査結果の発表はもちろん、現状紹介などは非常に興味深く聞くことができた。

ただひとつ残念なことは、今回の大会発表の大半が哺乳類の分野にかたよっていたことである。もちろん哺乳類を主体とした発表のなかでも、植生との関係や食物としての植物を取りあげた話も多く「野生生物保護」のための研究という意識は非常に強く感じられた。しかし、植物を担当している自分としてはもっと植物側からの発表がなされ、動物を専門とする方々からの意見を聞くことができたら、さらに良かったと思う。さらには、今後地理学や造園学、土木学等の分野からも多くの参加者が集まり活発な意見交換がなされることを望む。

また、我々が日常行っている業務においても他分野間での意見交換が重要であることを痛感したとともに、このような場で発表し多くの意見を聞き、さらによりよい仕事ができるようなこちら側の体制作りもしていく必要があると感じた。

今後、この学会が発展していくことを期待するとともに、我々の協力できることは何かを考えていきたい。

（大阪支社長・浜田拓）

編集委員会（敬称略）

丸山直樹・高槻成規・樋口広芳・池田啓・稲泉三丸・亀山章・中村和雄・杉山恵一・鈴木邦雄・和田一雄・土肥昭夫・福島司・畠山武道・磯崎博司・伊沢雅子・梶光一・前川光司・丸山幸平・宗原弘幸・新妻昭夫・小城春雄・大沢雅彦・大泰司紀之・上原重夫・渡辺弘之・渡辺邦夫・綿貫豊・由井正敏

【学会誌】

『野生生物保護』『フォーラム　ワイルドライフ』
『Journal of Wildlife Conservation』

◆問い合わせ先：
野生生物保護学会事務局
〒183　東京都府中市幸町3-5-8
東京農工大学農学部野生動物管理学講座
（生態系計画学講座）気付
TEL/FAX 0423-67-5738

野生生物保護学会の役割とは？

（大会資料より抜粋）

自然と人間、特に野生生物との関係を新しい視角から問い直し、
真にあるべき価値観と方法論をもって自然に接するための学問の発展の場。

学問領域

陸上・海洋の別を問わず、**自然の生物界の全て**。
個体、個体群、群集、群落、生態系の別も問わない。植物、動物などの分類群全てと、その生物が生息する地形も対象に含む。人間が生物界と関係するにあたっての制度や組織に関する研究も課題とする。
すなわち、**生物ー人間系に関する学問**こそが、本学会の対象領域である。